

東西舞台芸術融合の到達点—『能リア王』再演を観る Seeing the Second Presentation of *Noh: King Lear*

荒井 良雄
ARAI Yoshio

「日々是能楽」の現役最長老の女流能楽師である足立禮子と、「能シェイクスピア」で学位を授与された静岡大学名誉教授の上田邦義が、長年の芸と智と経験の積み重ねを結集して創造した『能リア王』の再演は、初演と同じ渋谷のセルリアンタワー能楽堂において、2008年5月10日午後2時50分から約1時間10分にわたって上演された。

リア王の末娘のコーディーリアを主人公（シテ）に据えて、悲惨な境遇に苦しむ80歳の老父を救うため、フランス王の妃に迎えられた彼女が、ドーヴァーの海岸に上陸するところから、上田『能リア王』は始まる。足立禮子の演じるコーディーリアが、新井麻衣子の侍女を連れて舞台に登場した瞬間、華麗な宮廷衣装に照明が当たると、コーディーリアはまるで女神の如く輝き、能舞台が太陽の光で眩いくらいに見えた。

ひたすら父の身を案ずるシテのコーディーリアと、過去の愚行と誤りを末娘に詫げる老父を演じる遠藤喜久のツレ、この親子の許し許される姿が、限りなく美しい。そこへ冷酷な長女と次女が隊長（遠藤博義）を派遣し、二人は幽閉の憂き目に会う。道化（遠藤博義）が登場すると、アイ狂言として、老王の過去の判断の誤りを語り、「この世は心と言葉と行動」の「三つの世界」だが、「三つの世界が一つにならねば、リア王殿は救われぬ」という「ワイズ・フール」（賢い道化）らしい台詞を述べて退場する。そのあとへ、コーディーリアの華麗な衣装を彼女の遺体に見立てて、それを抱きながら白に近い光の色調の衣装をつけた老王が登場する。ここからが、上田『能リア王』独自の、日本文化の伝統に根ざした世界である。おそらく作者はリアの最後の台詞、「見ろ、あれを、あれを・・・」と言って息を引き取ったあとの世界、リアが最後に見た世界を、能舞台に描いて見せる。老父と同じく白に近い陽光の色調の衣装に、巫女のような朱の袴をはいたコーディーリアの霊が現れると、舞を舞う。「あなたへ来たり給えや」と、老王は末娘に導かれて、相舞いで昇天していく。このラスト・シーンは、謡曲の傑作『羽衣』、木下順二の代表作『夕鶴』の最後の場面を想起させる。実に日本的で、キリスト教文化でも、仏教文化でもない、それより古い太陽信仰という根源的な文化を基盤にした世界が見えた。リアとコーディーリアが、太陽神アポロと女神ヴィーナスのように光り輝いて見えた。「太陽の年齢は23歳」（当日この舞台をご覧になった天文学者・日江井榮二郎氏の言葉）、私達の生命も緑の地球も太陽あ

ってのもの、青春の真っ只中にある太陽への感謝の祈りをラストシーンに感じた。半年前に初演を見たときは「禅の悟り」を感じたが、再演では太陽の力と生命の尊さが舞台に輝いているようだった。これは天照大神や卑弥呼女王の神話や伝説に富む日本独自の文化伝統から生まれた舞台芸術の真髄であって、再演を拝見できたのは有難かった。(2008/5/11)